

## 報告 セッションA イングランド啓蒙への視角——平明性、自律性、寛容性

世話人 柏崎正憲（早稲田大学・非常勤）

イングランド啓蒙研究会は、2018年6月に発足し、2019年度からは科研費研究課題にも採択され、精力的に研究活動を続けている（ウェブサイトは <https://english-enlightenment-f-j.blogspot.com>）。社会思想史学会においては、2019年大会でも「イングランド啓蒙における理性行使の徹底化」と題したセッション報告をおこなったが、今回のセッションでは「イングランド啓蒙とはそもそも何か」「そう呼ばれるべき思想の特徴や思想家群をどう識別すべきか」「イングランド啓蒙なる研究分野は成立しうるのか」という問題について論じた。

1. まずは報告者の武井敬亮（福岡大学・非会員）と青木滋之（中央大学・非会員）が「総論」にあたる報告をおこなった。

【武井報告】 イングランド啓蒙という主題は、近年の研究における伝統的啓蒙観の見直し、とくに啓蒙の複数性が前提とされるようになったことの一帰結である。イングランドという場で一つの主軸をなしたのは、宗教的熱狂に対する世俗的権威および個人の保障を問題にしたアングリカンと、この問いに対して別な回答を提示した理神論者との対立である。

【青木報告】 啓蒙の語義の拡散を避けるため、単数形の *the Enlightenment* に、人間の現世的境遇のよりよい理解と改善とを目指した「18世紀に特徴的な知的運動」(John Robertson) に照準を絞ることは、一つの方法ではある。しかし、思想史のみならず社会史の研究成果をふまえつつ、啓蒙を「より幅広い知の発酵現象」(Roy Porter) として、またしたがって複数形の *enlightenments* として捉えるならば、そのなかにはロックやトーランドのような思想家も「プレ啓蒙」ではなく啓蒙の一要素として含められるはずである。

2. ひきつづき青木、柏崎、武井の三名の報告者が、イングランド啓蒙を特徴づけるものとして本研究会が設定している三つのキーワード、すなわち平明性、自律性、寛容性について順に述べた。

【青木報告】 経験と「記述的で平明な方法」による真理への接近を旨とする「実験哲学の精神」の生成と展開を、「啓蒙」という標語以前の啓蒙的運動として見るべきこと。イングランドの王立協会からジョン・ロック『人間知性論』をへてダブリン哲学協会にいたるまでの概観。

【柏崎報告】 人間の知的自立と道徳的自律とを、カントにいたる啓蒙思想家たちに先駆けて基礎づけたのがジョン・ロックである。かれの哲学および政治学に触発されながら、すでに17世紀末のイングランドにおいて、宗教的および政治的な啓蒙のムーブメントがトー

ランドおよびモリニューとともに始まっていること。

【武井報告】 イングランド啓蒙における保守的・アングリカンの主題であった宗教的熱狂を、理神論者のアンソニー・コリンズもまた強く意識しており、それゆえに自由思想こそが寛容を促すという議論を展開したこと。このような理神論の展開に、イングランド啓蒙の特徴的要素としての寛容性の発展を見ることができること。

3. 以上の報告に対しては、多くの啓発的なコメントや質問が、討論者の沼尾恵（慶応義塾大学・非会員）と、午前にもかかわらずお集まりいただいた約10名の関心の高い参加者から寄せられた。コメントや質問の多くは、やはり「イングランド啓蒙」を独自の分野として設定することの是非という問題に集中した。本研究会メンバーでもある討論者の沼尾は、the Enlightenment の語りから離れつつも、同時に、時代を問わず既成の知的、政治的、宗教的な権威への批判を含んだ知的運動ならどんなものでも「啓蒙」とラベリングしてしまうことにより、この語を無意味にしてしまうことを避けるにはどうすればよいのか、という問題が提起された。隠岐さや香会員は、イングランド啓蒙の一特徴としての「平明性、経験性」という見方にかんして、実験哲学の源流はむしろ16世紀のイタリアにあったのではないかとコメントした。坂本達哉会員からは、当時の先進的社会としてのイングランドに対して、相対的に後進のフランス、スコットランド等々が追いつこうとするための思想というのが、歴史的現象としての啓蒙の本質ではなかったか、という問いが投げかけられた。そうだとすればイングランドの知的運動を啓蒙と呼ぶことはそもそも不可能であって、せいぜいその「出発点」または「起爆剤」としてしか位置づけられないというのが、坂本会員のコメントの趣旨であった。ほかにも紹介しきれないが、多くの有益な指摘をいただいた。

報告者三名は、これらの問いのすべてに十分な返答をできたわけではないが、イングランドが固有の啓蒙思想の場として研究されるべき理由の一端は示せたのではないかと思われる。17世紀のイングランドにおいても、先進的な思想や理念をめぐる討論の空間は成立しており、この空間における知的交換は啓蒙と呼ぶべき効果をもたらしていたはずである。それに、18世紀の数十年間に及ぶ知的運動が啓蒙の盛期であったとしても、それに先行する一連の過程にまで視野を拓けてみるならば、「科学革命」が数世紀にわたるプロセスを指すのと同じように、啓蒙もまた一世紀を超える長さに及ぶ知的発展の過程として捉える必要が出てくるのではないか。そのような展望をもちながら、本研究会は成果の公開に向けてひきつづき取り組んでいる。